

## アフォーダンスの観点から考える書架の構造

天ヶ嶋 建

家具と建築空間は切り離すことができない。同様に図書館家具である書架と図書館も切り離すことができない。書架を利用しやすくすることは図書館を利用しやすくすることにつながる。紙の図書を収納する家具である書架について、デジタル資料の普及により不要となる可能性こそあるものの、現時点でのデジタル資料の普及の度合いでは直ちに書架が不要となるものではないと考えられる。

本研究では、書架の利用しやすさについて検討する。そのため、アフォーダンスという概念に着目して考察を行う。アフォーダンスとは環境が人間を含む動物に与える情報であり、動物はその情報を得て行動を行う。この概念を書架について当てはめると、書架および図書という環境を構成するものの情報を得、人間が書架から図書を出し入れする動作が行われるという考え方となる。書架から図書を出し入れする動作を観察し、書架が利用者にとどのような情報を与えているのかについて、アフォーダンスの理論をもとに考察すること、そして得られた考察から利用しやすい書架の形態を提案することを本研究の目的とする。

本研究では大学生6名を対象として課題実験を行った。5つの条件の書架および図書の配置を用意し、それぞれの書架から実験協力者がどのように図書の出し入れを行うかについて観察および記録した。

実験の結果、書架から出し入れする図書が重い場合、出し入れする書架の段内の上部空間が狭い場合、出し入れする書架の段の位置が低い場合の3つの条件下で、特徴的な動作が見られた。その動作についてアフォーダンスの理論をもとに考察を行い、「重い図書は、図書を差し込むためにより多くの力を使うことをアフォードしている。そのため協力者の多くが両手を使用したと考えられる」、「上部空間を狭めた書架は、書架に図書を入れる時の空間を縦方向だけでなく横方向にも確保することをアフォードしている。そのため複数回にわたって横方向に空間を確保しようとして広げ動作を行ったと考えられる」、「書架の段にある十分な空間は利用者が書架に図書を入れることをアフォードするが、出し入れする書架の段の位置が低い場合は一段上の書架の段により遮蔽が起きるために、利用者は書架に図書を差し込むことが困難になったと考えられる」という考察を行った。

この考察に基づき、アフォーダンスの理論の下敷きである生態光学を用いて、書架からの光がより利用者へと届くような書架はどのような書架であるかを検討した。検討の結果、本研究で提案するより良い書架は、利用者の目の位置より下にある書架の段を傾け、利用者にとって手前側が高くなるようにする形態の書架となった。

(指導教員 呑海 沙織)